

日本比較文化学会中部支部
第11回支部大会
発表抄録

日時 令和元年 11 月30日(土)

会場 浜松学院大学

日本比較文化学会中部支部

日本比較文化学会 中部支部 第11回支部大会

I 例会日程 令和元（2019）年11月30日（土）

II 支部大会スケジュール 13:00～16:45（予定）

○13:00～ 開会の挨拶（中部支部長：白鳥 絢也）

○13:05～ 研究発表

○14:45～ 休憩

○15:00～ 総会

○15:15～ 勉強会

○16:30～ 閉会の挨拶（中部支部副支部長：津村 公博）

「カラオケ喫茶」という地域文化

大崎 洋（愛知大学総合郷土研究所）

カラオケ喫茶は、夜だけ営業するスナックとは違い、昼間からカラオケを歌いたい人たちが集う場所として、高齢者を中心に広がった喫茶店の一形態である。35～40年前が発祥といわれる。そこでは、演歌や歌謡曲中心に歌われる。たまに洋曲を歌うお客さんがいる。カラオケ喫茶の原型は「歌声喫茶」とされる。

杉浦明平（1913-2001）の著書『農の情景－菊とメロンの岬から－』の「1 プラチナとカラオケ」（注）には、田原市渥美町に住む働き者の女性達が、夜9時過ぎ、家の片づけが終わるや、近所の女性達とさそい合い、足繁くカラオケ喫茶に通い、村のカラオケ大会では満足できず、40km離れた豊橋市まで夜道を車で飛ばし、カラオケ喫茶・カラオケスナックに足繁く通う姿がユーモラスに描かれている。

田原市内で、当時から営業しているカラオケ喫茶「リピート」の経営者から話を聞くと、杉浦明平はカラオケ喫茶に通うことはなかったが、カラオケ好きのいろいろな人の聞き取りから、この本を書いたそうである。一方、豊橋ではカラオケ喫茶「オンステージ」・「タモン」がその舞台となっている。

『農の情景－菊とメロンの岬－』の発刊から31年経た現在、高齢（60～92歳）となった人達が通うカラオケ喫茶の実状について、この本に登場する豊橋・田原、隣接する豊川の東三河3市のカラオケ喫茶25軒を訪問し、経営者とそこに集うお客の実態を聞き取り調査し、カラオケ喫茶は地域文化にどのような役割を果たしているのかを考察した。

地域文化（local culture）は、本来、気候・風土・地形・方言など一定の地域範囲内において共通して見られる文化である。行政合併や制度的統廃合により、固有の地域文化は失われつつあるといえるが、カラオケ喫茶は、そのお店の客であること〈意識〉、カラオケ喫茶を拠点に歌謡祭会場に集い〈親睦〉、歌謡祭においてのカラオケ喫茶関係者の運営・進行〈分担〉そしてカラオケの祭典〈祭り〉の〈意識〉、〈親睦〉、〈分担〉、〈祭り〉は、まさに地域文化を形成するキーワードである。今回の訪問調査により、高齢者にとって、カラオケ喫茶に通うことは、生きがいであり、希望であり、幸福であると実感した。

（注） 岩波新書 1988 pp39-44

「地域教育課題研究」の授業スタイルに関する一考察

白鳥 絢也（常葉大学）

わが国の学習指導要領において、「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられている。「伝統や文化に関する教育の充実」については、中教審答申（平成 20 年）の中で、充実すべき重要事項の一つとして「国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である」と説明している。

また、地域の伝統や文化の教育に当たっては、①教科等において一つのトピックとして捉えて教材を開発し実践するレベル、②総合的な学習において地域の諸機関との協力を得ながら、ある程度まとまりのある単元として設定して実践するレベル、③あるテーマに関して地域の各種団体の主導においてプロジェクトを立ち上げ、学校や教師がそのプロジェクトに参画する形で実践するレベル、の三つのレベルがある。

これらのことを踏まえたうえで、令和元年度新設科目「地域教育課題研究」（常葉大学）における取り組みを紹介する。学生が主体的に企画・調査・報告を行った内容を取り上げる。

ラフカディオ・ハーンの邦訳研究 — “Yuki-Onna” における雪女の台詞の邦訳を中心に —

風早 悟史（山口東京理科大学）

ラフカディオ・ハーンの “Yuki-Onna” はこれまでに何度も邦訳されてきており、日本では作者の代表作の一つとして定着している。本発表では、同作において雪女が見せる二面性に着目し、ハーンの英文と複数の日本語訳を比較検討する。

まず、ハーンの雪女はきこりの Minokichi の運命を支配する女であるといえる。ある吹雪の日、小屋に避難した Mosaku と Minokichi の前に現れた雪女は、老人の Mosaku を殺してしまうが、若い Minokichi の命は奪わずにおいた。しかし、自分のことを他人に話せば殺すという一種の禁忌を Minokichi に課すことにより、彼女はその後の若者の人生を手中に収めてしまうのである。

一方、雪女は Minokichi に大きな恵みをもたらす女でもある。吹雪の夜から一年後、雪女は O-Yuki という人間の女に姿を変えて再度 Minokichi の前に現れる。二人はすぐに結婚し、Minokichi は十人もの子宝に恵まれる。しかも、O-Yuki はいつまでたっても老けこむことはなく、出会った日と変わらず “young and fresh” な妻であり続ける。

ハーンの “Yuki-Onna” の読みどころは、この良妻賢母の O-Yuki が再び妖怪雪女としての正体を現す瞬間にある。禁忌を破った Minokichi に向けて放つ最後の台詞には、彼女の激しく複雑な感情がよくあらわれている。それは平明な英語で書かれているものの、これまで様々な日本語に翻訳されてきた。本発表では、主に雪女の台詞の邦訳に着目することにより、そこにあらわれた日本での雪女像について考察する。

※ 本発表は、2018 年度～2021 年度科学研究費助成事業若手研究「日本でのラフカディオ・ハーン像の形成において邦訳が果たす役割」（18K12351）の助成を受けたものである。

**「送り出し地域」と「受け入れ地域」の2国間における
協働学習カリキュラムの開発**

津村 公博（浜松学院大学） 田島 喜代美（浜松学院大学）

「送り出し地域」と「受け入れ地域」の2国間の教育機関による、アイデンティティ形成の強化科目として、協働学習カリキュラムの開発およびその有効性についての研究。

地域の大学の役割と地域を担う人材育成 ー地域イノベーションの視点からー

田島 喜代美 (浜松学院大学／大学教育再生加速プログラム専門員／名古屋商科大学)

1.地域の大学の背景と役割

現在日本は、少子高齢化、地域コミュニティの衰退のなか、地域のグローバル化、地方創生が求められている。地域の大学は、地域の課題に応える社会イノベーションの創出とその担い手になる人材の育成（自らの人生と社会の未来を主体的に切り拓く能力の育成）が求められている。

2.浜松市の地域課題

浜松市は、フィリピン共和国にルーツがある子どもたちが多く在住している。平成20年のリーマンショック以降、日系ブラジル人や日系ペルー人など日系南米人の子どもの在籍者数は減少の傾向にあったが、近年、日系フィリピンの子どもの数は増加している。しかし、公立学校で不適應を起こし、不登校や不就学に陥る児童・生徒も少なくない。日系定住外国人の教育問題は、浜松市の大きな課題の一つである。

3.浜松学院大学の取り組みーPBL型の長期学外学修

浜松学院大学の「フィリピンダバオ市フィールドスタディ」は、文部科学省大学教育再生加速プログラムテーマⅣの長期学外学修ギャップイヤープログラムである。送り出し地域であるフィリピン共和国・ダバオ市に大学生が赴き、ダバオ市内の公立学校である DAVO CITY SPECIAL SCHOOL (DCSS) に1ヶ月間滞在し、教育実習を通して、フィリピンの子どもの生育環境や教育環境を学ぶ。「フィリピンダバオ市フィールドスタディ」のフィールドワーク手法は、協同・協働学習を通して地域の課題に取り組む「PBL型のアクティブ・ラーニング」である。

このプログラムに参加し、異なる文化における価値観の理解が向上した学生は、その後あわせて、リーダーシップ力の向上がみられる。多様な価値観を受け入れる許容の広がり、リーダーシップ力につながっていると考える。学生が組織する自主活動を通して、多様なリーダーシップ力のあらわれについて報告する。